

タイトル 純粹経験の体系性

副題 『善の研究』の構成に即して

氏名(所属) 佐野之人(山口大学)

本発表の目的は純粹経験の体系性を明らかにすることである。しかし純粹経験を対象にしてその体系性を明らかにすることはできない。我々自身が純粹経験そのものだからである。即ち我々自身が純粹経験の体系性に即して発展するのである。それ故純粹経験の体系性は我々の在り方に応じて異なる相を示すことになる。我々が『善の研究』の読者になる場合も同様である。テキストを前にして、これを外からあれこれ論ずるのは読者ではない。読むことを通じて自ら体系的に発展するのが読者である。そうした読者の前に『善の研究』は体系としての真実の姿を現わすことになる。『善の研究』の体系性の本質はその整然とした外形にあるのではなく、我々自身の発展そのものの内にある。従来の研究は我々自身の体系的発展を度外視してきたと言える。

こうして純粹経験の体系性は我々自身の体系性を通じて『善の研究』の体系性でもあることになったが、その体系性とは、純粹経験、反省(思惟、意志)、知的直観、即ち第一編各章タイトルに見られる体系的発展、さらにはこれを展開した全編、即ち第一編「純粹経験」、第二編「実在」、第三編「善」、第四編「宗教」(この四編は第一編の各章に対応する)に他ならない。

我々が『善の研究』を読むとき、我々はすでに、そうしてつねに純粹経験のうちにあるのであるが、そのことはさしあたり分からない。我々が『善の研究』というテキストを前にしてこれを読み始める時には反省の立場に立っているからである。『善の研究』は二度読まれることを想定した書である。「初めて読む人」は「純粹経験の立場」に立って読むべき第一編を略さなければならない。

反省は第二編において自らの純粹経験を想起反省することを通じてその体系性を理解する。それが「真実在の成立する方式」であり「根本的方式」である。これは反省にとっての「個々の純粹経験の体系性」である。さらに反省は純粹経験が「唯一実在」であることを理解し、そこから反省によって、自然、精神、宇宙、神が成立することを理解する。これは反省にとっての「学としての純粹経験の体系」である。反省は自らの意識現象をもとに、そこからすべてを理解する。それ故反省にとって第二編は科学的方法による「理論的研究」であり、その体系は心理主義的である。

反省は第三編において自らの意志とその根本を心理学と第二編の純粹経験説によって理解し、倫理学がこれまでのような「理論的研究」のように原因を論ずるものでなく、目的を論ずる「価値的研究」であることを理解する。そうして意志の目的が「善」であり、それが意志の目的である以上、意志の内面的要求から考えなければならないことを諸説の検討を通じて理解する。こうして反省は始めて自分の人生の全体を問題にするようになり、自らの内面的要求(人格の要求)に従って善を追求することになる。第二編では純粹経験は反省の対象であったが、第三編では要求として現われており、それが意志の対象となる。反省は純粹経験(人格)の要求を自覚的に実践することになる。その実践に終わりはない。それ故第三編の純粹経験の体系性は無限に続く(完結することなき)反省(思惟、意志)の体系性である。

第三編は「真の自己を知れ。そうすれば神意と冥合する。やれ！」という命令で終わっている。この実践には自己が真の自己(善)を対象(目的)としながらこれを実現しようとする、という不合理を含んでおり、しかも分別を本性とする反省はそれしかできな

い。それ故かかる実践は挫折せざるを得ない。この挫折が第三編と第四編の間の文字の書かれていない沈黙の場所でなされる経験である。第三編の無限に続く体系性はそのまま全体として崩落する体系性である。

「どうにもならない」。その時突如として「大なる生命」の方から「自己に対して」「宗教的要求」が聞こえて来る。それが「我々の自己がその相対的にして有限なることを覚知」せよ、「絶対無限の力に合一してこれに由りて永遠の真生命を得んと欲」せよ、との要求である。ここでは「自己を信ずるの念」が破れ、反省が破れている。かかる要求の頂点が主客合一としての「見神の事実」であり、宗教的な知的直観、即ち宗教的覚悟である。この宗教的覚悟において、再び個人が見出される。これがパウロの「既にわれ生けるにあらず基督我にありて生けるなり」という宗教的覚悟を含み得る、「個人あって経験あるにあらず、経験あって個人あるのである」という哲学的根本経験である。そうしてこの極致の主客合一の状態が、経験の内意識本来の状態として反省の背後に働いていたことを観ずる。ここにおいて純粹経験が「能動的」に理解されることになる。それが、哲学的には純粹経験が純粹経験から反省(思惟、意志)を経て知的直観に帰るという運動に他ならない。それ故第四編における純粹経験の体系性は宗教的な知的直観の体系性であり、完結した体系性である。

こうして読者は宗教的覚悟を含み得る哲学的な知的直観を得て、出立点に戻って来る。これによって第二編における個々の純粹経験が全体において日常性として復活する。反省にとって特殊な意識状態であった純粹経験は、反省が破れることによって刹那の純粹経験となり、さらにそれが既にそうして常に我々がそのうちにあった日常性の純粹経験として自覚される。以前反省にとって「経験」とは「経験されたもの」であったが、直観は「経験する」を内から見る。こうして第二編の反省された純粹経験の体系性は同時に直観する体系性となる。

「理論的研究」であった第二編の学的体系は出立点の純粹経験が直観によって基礎づけられることによって、同時に「価値的研究」となり形而上学となる。しかしこの形而上学は原理(純粹経験)の実体化を拒絶する形而上学でもある(それが第三編末尾での経験であった)。この学は哲学的な直観を展開したもので宗教的覚悟同様完結した体系となる。

第二編の前半部を詳説したものが第一編である。ここでは個々の経験の全てが純粹経験であり、逆に言えば「意識の厳密なる統一」としての純粹経験も微細に見れば反省であり、反省と純粹経験の違いは「程度の差」ということになる。ここにあるのは反省に基づく対立矛盾と直観に基づく統一の不息の運動のみである。反省は体系の衝突を見、直観は統一的或る者の発展を見る。

反省にとってこの運動はどこまでもより大なる統一へと向う無限進行である。以前はこの無限進行が反省を挫折に導いた。個々の経験において直観と反省の統一が成立していても、全ての経験(生死)を貫く統一力(真の自己、神)が直観されていなかったためである。しかし宗教的覚悟を含む哲学的直観を得て、宗教と哲学において完結した体系を自得した直観はこの無限進行の内に常にただ一つのもの(統一力、真の自己にして神)をみることになる。ここに動中静、静中動が成立する。すなわちどこまでも豊富深遠となりながら(動)、絶えず最大最深であるような統一の直観(静)、これが第三編末尾の宗教道徳美術の極意にして平常日常であり、そうした平常日常における純粹経験の自発自展としての「純粹経験の体系性」の完遂態である。